

高校生における先生・親への進路相談と進路意識との関連

鹿内 啓子

Keiko SHIKANAI

目次

- I 問題
- II 方法
- III 結果

- 1. 尺度の因子構造
- 2. 進路相談の有無と相談相手の人数
- 3. 相談相手
- 4. 相談の有無と進路意識との関連
- 5. 相談相手の多少と進路意識との関連
- 6. 相談相手別の相談の有無と進路意識との関連

IV 考察

- 1. 進路相談状況と相談相手
- 2. 進路相談と進路意識との関連

[Abstract]

The Relationship between Consulting with Teachers and/or Parents and Attitude toward Career in High School Students

The purpose of this study is to reveal the relationship between consulting with teachers and/or parents about career and attitude toward career in high school students. 644 high school students were asked to respond to questions about the career adviser. In addition, students were asked to complete a career decision-making self-efficacy scale and a career indecision scale. Consulting with teachers about career doesn't have any effect on attitude toward career of high school students. On the other hand, consulting with mother and/or father improves attitude toward career in both male and female students of all grades. Advice from parents is helpful for career decision-making of high school students.

I 問題

高校生にとって卒業後の進路の決定がもっとも重要な事柄であることは言うまでもない。進路決定をする際に、将来の自分の生き方や職業を見据えてそれに向けた最適な進路を決めることが望ましいが、展望をもって高校生活を送ったり進路決定をすることは難しい。とくに今、高校生を取り巻く社会環境は厳しく、自分が希望する進路が明確であってもそれが実現されるかどうかの保証はない。自分の目標を見つけてその実現を目指して努力すれば夢が叶うという状況ではなくって

きている。止むを得ず不安定で不利な非正規雇用に甘んじなければならない若者も多い。また希望の仕事に就けたとしても厳しい労働環境のため心身に問題を抱えたり、離職や転職をせざるを得ない若者も増えている。

他方、少子化により大学受験者が大きく減少し、また大学入試の形態も多様化したため、家庭の経済的条件が許せば、大学進学は全体的に低くなっている。とりあえず大学に進学しておくことが容易になってきている。

このように社会の先行きが不透明で自分の将来像を描くのも難しい状況の中で、高校生が進路選択をしていく際には、他者と相談し、

キーワード：進路相談、進路意識、高校生

Key words: Consulting about Career, Attitude toward Career, High School Students

アドバイスを受けることがますます必要になってくる。身近な他者の影響はいつの時代の高校生の進路決定に対しても重要であり、これまでいくつかの研究がなされてきた。

測上(1984a)は、高校生の大学進学動機を「大学の本来の機能」、「家族への配慮と規範機能」、「モラトリアム機能」、「大学の副次的機能」、「大学の経済価値機能」の5つに分け、教師、父親、母親、友人の4つの人的影響源との関連を高校3年生について検討した。その結果、教師からの影響を受けたと認知している生徒は大学の本来の機能の進学動機をもつ場合が多く、父親からの影響を認知している生徒はモラトリアム機能をもつことが少なく、経済価値機能の進学動機をもつことが多かった。また母親の影響を認知している生徒では、大学の本来の機能の動機が少なく、家族への配慮と規範機能の動機が多かった。これらの結果は、それぞれの影響源の役割に伴う社会的勢力の観点から考察された。さらに測上(1984b)は特定の大学を選択する動機を、「志望大学の内容の充実」、「経済的地理的要因」、「自己実現への適合」、「入学の可能性」の4つに分類して人的影響源との関連を高校3年生について検討した。ここでも人的影響源による動機の違いがみられ、教師が人的影響源になっている生徒では自己実現への適合の動機をもつ者が多く、経済的地理的要因をもつ者は少ない。また母親を影響源と認知している生徒は経済的地理的要因を動機としてもつ場合が多く、友人からの影響を受けたと認知している生徒では自己実現への適合が少なかった。

清水・坂柳(1988)では、高校1年生～3年生を対象にして、先生、父親、母親、友人のそれぞれと将来の進路について話したり相談したりする程度と「進路意思決定」、「教育的進路成熟」、「職業的進路成熟」との関連を検討した。それによると、父親と話す程度は女子よりも男子の進路成熟と関係しており、

逆に母親と話す程度は女子の進路成熟と関係していた。また先生と話す程度は他のエージェントよりは弱いものの男子の進路成熟と関連していたが、女子については主に2年生で関連がみられた。

また古澤・山下(1993)では、女子高校生を対象に、大学・短大進学、専門学校進学、就職の3つの志望群ごとに進路志望動機尺度の因子分析を行ったところ、大学・短大志望群と就職志望群で「親の勧め・家族への配慮」因子が得られた。

このように高校生の進路意識は身近な他者からの影響を受けること、また誰から強く影響を受けているかによって進路意識が異なることが示された。これらの研究は今から20年から30年前のものであるが、先生、父親、母親、友だちと進路や将来のことについて話すかどうかは今も高校生の進路意識と大きく関連しているだろう。適切なアドバイスや有益な情報を得ることは進路を考える上で役立つことは当然であるが、コミュニケーションそのものが進路を考えるよい機会となろう。しかし他方でこの20年から30年の間に親子関係、教師－生徒関係、また友人関係も変化してきた。またいわゆる情報化社会となり高校生が自ら進路に関する情報を入手することが可能になるなど、社会の仕組みが大きく変化している。そこで本研究では、これら4名と進路や将来のことについて相談することが、進路や職業意識とどのように関連しているかを検討する。ここでは、進路・職業意識については、下山(1986)の職業未決定と、浦上(1993)によって進路成熟と強く関連していることが明らかにされた進路決定自己効力感の2つを取り上げる。

Ⅱ 方法

1. 調査対象者

札幌市内のH高校の全クラスの生徒を調査

対象とした。回答者は、1年生232名、2年生230名、3年生200名。回答に不備があるものを除いた分析対象者は、1年生227名（男子116名、女子107名、不明4名）：2年生226名（男子129名、女子97名）：3年生191名（男子113名、女子72名、不明6名）合計644名。

2. 調査内容

(1) 希望進路・親の希望の認知

自分の希望進路について、専門学校進学、短大進学、4年制大学進学、公務員、一般企業、その他、未定の7つから1つを選択させた。また希望学部や分野の有無も回答させた。親の希望の認知については、生徒自身の希望進路と同じ選択肢（ただし、「未定」の代わりに「特に希望はない」）の中から、親が希望していると思うものを3つまで選ばせた。

(2) 相談の有無と相談相手

進路や将来のことについて誰かに相談しているかどうかを尋ねた。その後、相談している場合はその相談相手を、相談していない場合は相談したい相手を、順位をつけて3名まで選ばせた。選択肢は、高校の先生、小学校や中学校の先生、塾の先生や家庭教師、父親、母親、きょうだい、友だち、中学や高校の先輩、親戚の人、その他の10名である。

(3) 進路選択自己効力感尺度

富永（2006）の進路選択自己効力尺度を参考にして、進路を選択する過程に必要な事柄12項目について、自信の程度を5段階で評定させた。

(4) 職業未決定尺度

大学生の職業未決定状態を測定するために下山（1986）によって作成された「職業未決定尺度」39項目から選ばれた31項目について、女子高校生を対象に因子分析した結果（鹿内、2004）を参考に、15項目を用いた。各項目について自分に当てはまる程度を5段階で評定させた。

(5) その他

調査内容には、将来の仕事を考えるきっかけになった事柄、進路や職業を決めたり考えたり時に影響する要因、将来のことを考えた時の気持ち、親との関係についての認知が含まれているが、本研究の報告では扱わない。

3. 調査手続き

高校に依頼し、授業時間の一部を使って、授業担当教員に実施していただいた。所要時間は15～20分であった。なお縦断的調査を計画していることから、調査用紙に記名をお願いした。この際には、同一人物であることを知るために記名が必要なこと、回答は研究目的以外には使わないこと、個人の回答を問題にせず全体の傾向を調べることを説明して理解を求め、回答した調査用紙は自分で封筒に入れて封をして提出させた。

4. 調査時期 2014年6月

Ⅲ 結果

1. 尺度の因子構造

職業未決定尺度について因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った結果、3因子構造として解釈されると判断した。第1因子は、「自分なりに考えた結果、やりたい職業をしばった」（逆転項目）、「自分が職業としてどのようなことをやりたいのか、わからない」など将来の職業をまだ決められていない状態を表す内容であることから、「未決定因子」と名付けた。第2因子は、「将来自分が働いている姿が、まったく思い浮かばない」、「将来誤った職業決定をしてしまうのではないかという不安がある」など職業に対する不安や不確かさを表しているので「不安因子」とした。第3因子は、「将来の職業については、考える意欲がわからない」、「自分を採用してくれるなら、どのような職業でもよい」など職業について考える意欲の低さと安易な

気持ちを示しているので、「安直・回避因子」と名付けた。

進路決定自己効力感尺度について因子分析(主因子法, プロマックス回転)を行ったところ, 2 因子構造が得られた。第 1 因子は, 「自分が望むライフスタイルに合った職業をさがすこと」, 「5 年先の目標を立て, それに従って計画を立てること」など自分に適した職業を決めることや見通しをもってやるべきことの計画を立てることに対する自信を表している, 「計画・決定効力因子」と名付けた。第 2 因子は, 「進路や職業について, 先生と話し合うこと」, 「大学, 専門学校, 就職の情報を自分で集めること」など, 生徒が先生や親と相談することや進学や就職の情報を集めることに対する自信を示している, 「相談・情報効力因子」とした。

いずれの下位尺度についても, それぞれに含まれる項目の評定値の合計を項目数で除した数値を下位尺度得点とした。また進路決定自己効力感尺度については, 1 因子構造として扱っている研究が多いことから, 全般的な自己効力感の程度の指標として, 全項目の得点を加算したものを「自己効力」と名付け, 下位尺度得点と合わせて分析する。

2. 進路相談の有無と相談相手の人数

学年および性別に, 相手に関わらず誰かに進路や将来のことを相談している生徒の割合を示したものが図 1 である。男女別に相談の有無×学年の χ^2 検定を行ったところ, どちらも有意となり (男子: $\chi^2=15.39$, $p<.001$, 女子: $\chi^2=22.36$, $p<.001$), いずれも学年が上がるのと相談する生徒の割合も増す。

相談している生徒の相談相手の人数が学年や性別によって異なるのかどうかを検討するため, 男女別に学年×相談相手数(1~3)で χ^2 検定を行った。男子では有意にはならなかった ($\chi^2=8.12$, $df=4$, $p<.10$) が, 女子では有意となり ($\chi^2=26.83$, $df=4$,

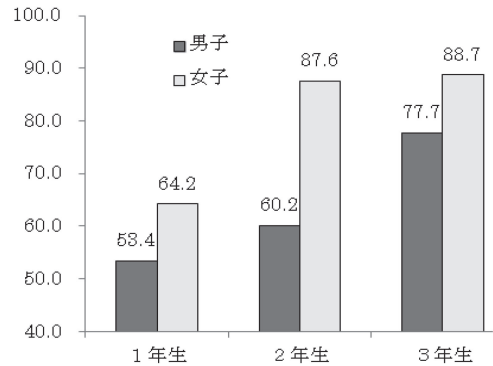


図 1 進路について相談している割合

$p<.001$), 3 年女子では相談している生徒のほぼ80%が3 名すべてを選んでいた。1 年女子と 2 年女子では3 名を選んだ割合はそれぞれ42%と43%と半数以下であり, 1 名だけ選んだ生徒も39%と29%とかなりいた。

また学年ごとに性別×相談相手数(1~3)で χ^2 検定を行った結果, 1 年生では有意な傾向 ($\chi^2=5.06$, $df=2$, $p<.10$) がみられ, 男子より女子で1 名だけを相談相手としている割合が高い傾向があった。2 年生では有意な結果ではなかったが ($\chi^2=1.51$, $df=2$, n.s.), 3 年生で有意 ($\chi^2=10.36$, $df=2$, $p<.01$) となり, 女子では3 名すべてを選んだ割合が79.6%であり, 男子の52.1%を大きく上回った。

3. 相談相手

相談相手については10名の中から3 名まで選ばせたと, 高校の先生, 父親, 母親, 友だちの4 名以外の選択はどの学年でもほとんどなかった, この4 名について男女別の学年ごとの選択率を示したものが, 図 2 である。なお, ここでの選択率は, 選択順位に関わらず相談している相手および相談していないが相談したい相手として選択された場合をすべて含んだものである。性別, 学年に関わらず母親がもっとも選ばれている。それに対して父親は, 男子では1, 2 年生で母親に次ぐ相談相手となっているが, 女子では友だ

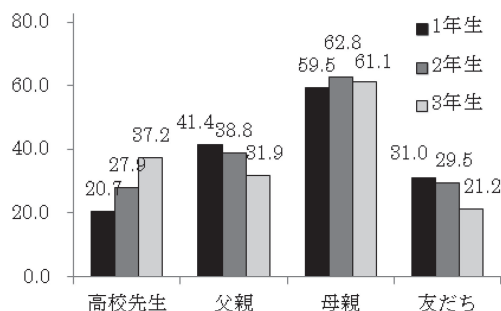


図2-1 各相談相手の選択率（男子）

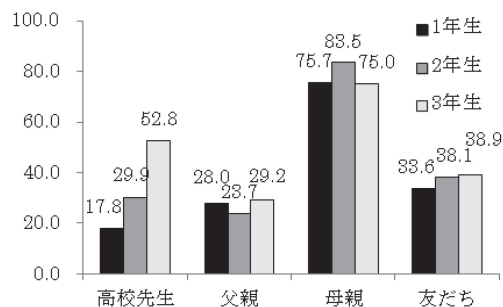


図2-2 各相談相手の選択率（女子）

よりも低い選択率である。先生の選択率は男女とも学年が上がるにつれて上昇し、3年生では父親の選択率を上回る。とくに女子での増加が大きく、3年生では半数以上の生徒が選んでいる。性差については、父親を除いて男子より女子の方が母親、先生、友だちと相談している、あるいは相談したいと思っている生徒の割合が高い。

4. 相談の有無と進路意識との関連

身近な誰かに自分の進路や将来のことを相談することが、高校生の進路決定自己効力感や職業未決定状態とどのように関連しているのかを検討する。相手を問わず進路などを誰かに相談している生徒と相談していない生徒とで進路決定自己効力感の3因子と職業未決定尺度の3因子に違いがあるかどうかを、学年ごとに独立したサンプルのt検定を行って検討した。なお2年女子と3年女子では相談していない生徒のサンプル数が少ないため、ここでは男女を合わせて分析した。表1がその結果である。

すべての学年において、また6つの下位尺度得点すべてにおいて、有意差が得られた。相談している生徒は相談していない生徒に比べて、すべての自己効力下位尺度得点が高く、すべての職業未決定下位尺度得点は低かった。

5. 相談相手の多少と進路意識との関連

相談している場合、相談相手が多いか少ないかによっても進路決定自己効力と職業未決定状態に違いがみられるかどうかを検討した。ここでは相談相手を3名までに限定したので、3名すべてを選択している場合を「多」群、1名または2名の場合を「少」群とした。6つの下位尺度得点について、相談相手の多少×学年の2×3の2要因の繰り返しのない分散分析を行った。その結果が表2である。

男子では「未決定」および「安直・回避」で相談相手の多少の主効果が有意であった。相談相手が多い生徒のほうが少ない生徒よりも「未決定」下位尺度得点も「安直・回避」下位尺度得点も低かった。学年の主効果と交互作用はどの下位尺度でも有意ではなかった。女子については「相談・情報効力」と「安直・回避」で相談相手の多少の主効果が有意であった。相談相手が多い生徒の方が少ない生徒よりも「相談・情報効力」下位尺度得点が高く、「安直・回避」下位尺度得点が高い。また女子では交互作用が「計画・決定効力」と「自己効力」で有意であった。単純主効果の検討をしたところ、どちらの下位尺度についても、2年生で相談相手の多少の主効果が有意であり、多い生徒のほうが少ない生徒よりも得点が高かった。また相談相手の少ない場合だけで学年の主効果が有意であり、1年生と3年生よりも2年生でこの2つの下位尺度得点が低かった。表2にみられるように、

表 1 相談の有無による進路決定自己効力と職業未決定状態の比較

		進路決定自己効力感尺度			職業未決定尺度		
	<i>n</i>	計画効力	相談効力	自己効力	未決定	不安	安直・回避
1 年生	相談あり (133)	3.26 (0.69)	3.61 (0.75)	40.18 (7.59)	2.74 (1.10)	3.01 (0.93)	1.81 (0.70)
	相談なし (92)	2.96 (0.67)	3.18 (0.77)	36.14 (7.34)	3.08 (1.04)	3.40 (0.87)	2.27 (0.79)
	<i>t</i> 値	3.28**	4.24***	3.98***	2.32*	3.18**	4.60***
2 年生	相談あり (162)	3.14 (0.83)	3.65 (0.85)	39.22 (9.15)	2.78 (1.25)	3.08 (0.98)	1.75 (0.72)
	相談なし (63)	2.68 (0.83)	3.14 (0.90)	33.59 (9.68)	3.53 (0.98)	3.41 (0.77)	2.36 (0.77)
	<i>t</i> 値	3.71***	3.91***	4.08***	4.80***	2.65**	5.60***
3 年生	相談あり (156)	3.30 (0.74)	3.77 (0.83)	41.00 (8.55)	2.44 (1.13)	2.75 (0.96)	1.80 (0.76)
	相談なし (33)	2.65 (0.76)	2.84 (1.01)	32.39 (9.47)	3.27 (1.06)	3.35 (0.94)	2.54 (0.85)
	<i>t</i> 値	4.54***	5.58***	5.15***	3.89***	3.28**	4.97***

自由度: 1 年生223, 2 年生223, 3 年生187 () 内は標準偏差 * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

表 2 相談相手の多少と学年による進路決定自己効力と職業未決定状態の差異

		進路決定自己効力感尺度			職業未決定尺度		
	<i>n</i>	計画効力	相談効力	自己効力	未決定	不安	安直・回避
男 子	1 年生 相手数少 (29)	3.32 (0.63)	3.76 (0.71)	41.17 (7.33)	2.82 (1.13)	2.98 (1.02)	1.99 (0.83)
	多 (28)	3.42 (0.67)	3.64 (0.83)	41.68 (7.43)	2.64 (1.08)	2.81 (0.97)	1.82 (0.63)
	2 年生 相手数少 (43)	3.31 (0.90)	3.66 (0.94)	40.77 (10.16)	2.76 (1.31)	2.83 (1.01)	1.80 (0.69)
	多 (33)	3.55 (0.62)	3.90 (0.64)	43.61 (6.74)	2.40 (1.22)	2.88 (1.06)	1.61 (0.72)
	3 年生 相手数少 (35)	3.29 (0.68)	3.39 (0.88)	39.77 (8.28)	2.68 (1.09)	2.74 (1.06)	1.95 (0.88)
	多 (38)	3.46 (0.71)	3.75 (0.78)	42.34 (8.26)	2.15 (1.03)	2.37 (0.85)	1.66 (0.74)
	相手数主効果	2.66	1.95	2.87	4.69*	1.36	4.06*
	学年主効果	0.15	1.27	0.36	1.22	2.39	1.18
	交互作用	0.15	1.42	0.37	0.38	0.85	0.12
	1 年生 相手数少 (37)	3.20 (0.85)	3.50 (0.77)	39.32 (8.98)	2.80 (1.13)	3.04 (0.91)	1.77 (0.72)
女 子	多 (27)	3.10 (0.54)	3.64 (0.77)	38.81 (6.06)	2.52 (1.07)	3.20 (0.95)	1.69 (0.66)
	2 年生 相手数少 (48)	2.66 (0.69)	3.31 (0.89)	33.88 (7.92)	3.10 (1.28)	3.42 (0.74)	1.91 (0.78)
	多 (36)	3.22 (0.83)	3.83 (0.74)	40.47 (8.45)	2.71 (1.14)	3.11 (1.06)	1.59 (0.64)
	3 年生 相手数少 (11)	3.33 (0.82)	3.73 (0.83)	41.18 (8.92)	2.33 (1.25)	2.93 (1.07)	2.05 (0.85)
	多 (43)	3.17 (0.67)	3.98 (0.73)	40.47 (7.65)	2.31 (1.10)	3.01 (0.85)	1.62 (0.52)
	相手数主効果	0.70	5.93*	1.99	1.56	0.03	6.53*
	学年主効果	2.74	1.81	2.76	3.18*	1.41	0.28
	交互作用	4.89**	1.10	4.49*	0.30	1.36	0.85

() 内は標準偏差 * $p<.05$, ** $p<.01$

自由度: 相手数主効果は, 男子で1/200, 女子で1/196, 学年主効果と交互作用は男子で2/200, 女子で2/196

2 年生の女子で相談相手が少ない生徒だけが他の 5 群の生徒に比べて, 「計画・決定効力」および「自己効力感」が低いのである。職業未決定の 3 つの下位尺度では交互作用が有意ではなかった。

6. 相談相手別の相談の有無と進路意識との関連

誰かに相談すること, また相談相手が多いことが進路決定自己効力の高さおよび職業未

決定の低さと結びついていた。それでは誰を相談相手にするかによってこの効果は異なるのだろうか。これを検討するために, 先生, 父親, 母親のそれぞれについて, 男女別に相談の有無×学年の 2×3 の 2 要因の繰り返しのない分散分析を行った。友だちについては選択率が高くないので, ここでは友だちを除く 3 名について報告する。

先生への相談の有無については, 女子の「安直・回避」下位尺度において有意な傾向

表3 父親と母親への相談の有無と進路決定自己効力および職業未決定状態

		進路・職業自己効力感尺度			職業未決定尺度		
	<i>n</i>	計画効力	相談効力	自己効力	未決定	不安	安直・回避
父親・男子	1年生 相談あり (48)	3.36 (0.64)	3.54 (0.79)	40.90 (7.30)	2.81 (1.04)	2.97 (1.00)	2.03 (0.70)
	なし (68)	3.12 (0.68)	3.45 (0.79)	38.47 (7.63)	2.98 (1.16)	3.13 (0.94)	2.12 (0.88)
	2年生 相談あり (50)	3.37 (0.78)	3.75 (0.78)	41.56 (8.78)	2.69 (1.20)	3.05 (1.07)	1.91 (0.86)
	なし (79)	3.03 (0.90)	3.44 (0.94)	37.57 (10.24)	3.11 (1.24)	3.06 (0.92)	2.02 (0.79)
	3年生 相談あり (36)	3.33 (0.73)	3.56 (0.85)	40.67 (8.68)	2.44 (1.02)	2.83 (1.06)	1.98 (0.93)
	なし (77)	3.15 (0.87)	3.45 (1.05)	38.65 (10.55)	2.79 (1.18)	2.79 (1.02)	2.06 (0.89)
	相談主効果	8.55**	3.08	7.80**	5.93*	0.16	0.99
	学年主効果	0.12	0.45	0.01	2.03	2.14	0.56
	交互作用	0.27	0.55	0.37	0.38	0.27	0.01
父親・女子	1年生 相談あり (30)	3.11 (0.73)	3.37 (0.82)	38.10 (7.98)	2.94 (1.24)	3.47 (0.96)	1.93 (0.81)
	なし (77)	3.00 (0.72)	3.39 (0.79)	37.19 (7.95)	2.80 (1.01)	3.21 (0.84)	1.88 (0.70)
	2年生 相談あり (23)	3.16 (0.79)	3.96 (0.68)	40.30 (7.73)	2.62 (1.15)	2.99 (0.94)	1.59 (0.56)
	なし (74)	2.72 (0.79)	3.27 (0.88)	34.30 (8.85)	3.15 (1.24)	3.42 (0.82)	1.91 (0.77)
	3年生 相談あり (21)	3.19 (0.57)	3.87 (1.00)	40.33 (7.14)	2.71 (1.15)	2.93 (0.87)	1.76 (0.68)
	なし (51)	3.19 (0.77)	3.76 (0.79)	39.96 (8.71)	2.31 (1.22)	2.93 (0.97)	1.79 (0.69)
	相談主効果	3.17	5.32*	4.54*	0.00	0.24	1.02
	学年主効果	1.79	5.09**	2.25	2.15	3.87*	1.08
	交互作用	1.57	3.83*	2.46	2.88	2.93	1.43
母親・男子	1年生 相談あり (69)	3.27 (0.64)	3.60 (0.73)	40.25 (6.97)	2.84 (1.11)	3.09 (1.06)	2.05 (0.78)
	なし (47)	3.15 (0.73)	3.32 (0.85)	38.34 (8.29)	3.01 (1.12)	3.03 (0.80)	2.13 (0.84)
	2年生 相談あり (81)	3.36 (0.85)	3.72 (0.91)	41.40 (9.75)	2.80 (1.24)	3.01 (1.02)	1.90 (0.80)
	なし (48)	2.82 (0.79)	3.29 (0.81)	35.27 (8.88)	3.20 (1.20)	3.14 (0.91)	2.09 (0.84)
	3年生 相談あり (69)	3.29 (0.70)	3.56 (0.82)	40.25 (8.27)	2.52 (1.10)	2.64 (0.98)	1.83 (0.86)
	なし (42)	3.10 (0.99)	3.37 (1.20)	38.05 (12.12)	2.90 (1.16)	3.01 (1.07)	2.27 (0.84)
	相談主効果	10.77**	9.70**	12.00**	6.48*	1.74	6.86**
	学年主効果	0.83	0.09	0.38	1.86	2.11	0.38
	交互作用	2.45	0.56	1.99	0.32	1.30	1.39
母親・女子	1年生 相談あり (81)	3.05 (0.75)	3.44 (0.82)	37.73 (8.36)	2.84 (1.07)	3.30 (0.87)	1.87 (0.71)
	なし (26)	3.00 (0.64)	3.19 (0.67)	36.58 (6.51)	2.83 (1.12)	3.25 (0.92)	1.98 (0.80)
	2年生 相談あり (81)	2.93 (0.76)	3.58 (0.76)	37.12 (8.26)	2.99 (1.22)	3.31 (0.83)	1.79 (0.73)
	なし (16)	2.30 (0.82)	2.65 (1.08)	28.63 (9.13)	3.21 (1.29)	3.39 (1.04)	2.08 (0.75)
	3年生 相談あり (54)	3.21 (0.69)	3.88 (0.78)	40.54 (7.80)	2.34 (1.10)	2.97 (0.88)	1.75 (0.66)
	なし (18)	3.12 (0.79)	3.52 (1.00)	38.67 (6.51)	2.69 (1.50)	2.79 (1.11)	1.88 (0.73)
	相談主効果	5.34**	18.23***	9.90**	1.15	0.13	2.72
	学年主効果	8.22***	7.27**	9.33***	3.38*	4.38*	0.49
	交互作用	2.84	3.07*	3.56*	0.39	0.30	0.28

自由度 相談主効果：父親・男子で1/352，母親・男子で1/350，女子は1/270
 学年主効果と交互作用：男子・父親で2/352，男子・母親で2/350，女子は2/270
 () 内は標準偏差 * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

($F=3.32$, $df=1/270$, $p<.10$) がみられ，先生に相談する生徒のほうが「安直・回避」が低い傾向であったが，他の下位尺度については有意な効果がみられなかった。しかし父親および母親についてはいくつか有意な効果がみられた。表3は相談相手が父親および母親場合の各平均値と分散分析の結果である。

父親との相談については，男子では相談す

る生徒の方が「計画・決定効力」と「自己効力感」が高く，「未決定」が低い。女子では父親と相談する生徒の方が「相談・情報効力」と「自己効力感」が高いが，「相談・情報効力」については交互作用も有意であり，父親と相談するかないかの差異は2年生だけで有意であった。母親と相談するか否かの効果は男女共に自己効力尺度の3下位尺度すべてで有

意であり、母親と相談する生徒のほうが自己効力のすべての下位尺度得点が高い。女子では交互作用も「相談・情報効力」と「自己効力感」で有意であり、父親の場合と同様に2年生で母親と相談するかどうかによる差が有意であった。職業未決定尺度については、男子の「未決定」と「安直・回避」で相談の主効果が有意であり、母親に相談している生徒のほうがいずれの得点も低かった。

Ⅳ 考 察

1. 進路相談状況と相談相手

相手を問わず誰かに進路について相談している高校生の割合は学年が上がると上昇し、3年生ではほとんどの生徒が相談している。リクルート進学総研が行った第5回「高校生と保護者の進路に関する意識調査」(2012)では、高校2年生の75%が、進路について「親とよく話す」または「たまに話をする」と答えており、本研究の結果とほぼ同じ割合である。性差についてはどの学年でも女子は男子より相談する割合が高く、2年生で急増している。本研究では報告していないが、進路決定に影響する要因について影響を受ける程度を推測させたところ、男子より女子で先生や親の影響を認知している。これらを考え合わせると、男子よりも女子で周りの人々に依存する傾向があると言えよう。

相談相手については、どの学年でもまた男女とも母親がもっとも多く相談相手として選ばれている。これは前述のリクルート進学総研(2012)の調査結果と同じである。一番身近でコミュニケーションする機会が多く、自分をよくわかってくれていると認知されているのであろう。父親は女子では友だちよりも相談されていないが、男子では総じて2番目の相談相手となっている。男子生徒にとっては身近な職業人であり、モデルになりやすいのであろう。教師は他の3名と異なり、学年

と共に選ばれる割合が上昇する。3年生では男女とも母親に次ぐ2番目の相談相手になっている。特に3年女子は半数以上が相談している。教師と生徒の関係や教師の役割が変わってきたとは言え、教師が進路指導において重要な役割をもっていることは変わらない。測上(1984a)において、教師の影響を認知している生徒は専門家勢力としての教師の影響を受けて大学の本来的機能を進学動機とすることが示されたように、本研究でも、生徒は進路指導の専門家としての教師を信頼していると思われる。

2. 進路相談と進路意識との関連

相手を問わず誰かに相談している生徒は誰にも相談していない生徒よりも、どの学年でもすべての下位尺度で自己効力が高く、職業未決定状態が低いという明確な結果が得られた。関連性の方向については不明であるが、相談することで進路・職業意識が高まり、自己効力も増し、またそれによって相談したい事柄も生じ、積極的に相談しようという動機も高まるのであろう。

相談相手の人数については、3名の場合と1名または2名の場合とで有意な差がみられた下位尺度は多くはなかったが、全般的に3名に相談している方が自己効力が高く、職業未決定は低かった。本調査では相談している相手の選択を3名までに制限したため、相談相手の多少の差は小さいが、それにもかかわらず一貫した結果となった。幅広い相手に相談すれば新しい情報やアドバイスが得られ、進路意識が高まるであろうし、また進路意識が高く前向きに進路について考えようとするために多くの人に積極的に相談しようとするのであろう。

相談相手別に相談している、または相談したいと思っている生徒と相談相手として選んでいない生徒とで進路意識を比較したところ、1年生では男女ともまたどの相談相手に

についても、相談相手として選ばれているかどうかによる違いは、6つの下位尺度すべてでみられなかった。また3年生についてはひじょうに限定的な差異がみられただけであった。しかし前述のように、相談相手を問題にせず相談しているか否かで比較すると、1年生でも3年生でも明らかな違いがみられた。1年生については、調査時期が6月と入学間もない時期であり、進路決定はまだ先のことである。このような時期から相談している生徒は、その相談相手が誰であっても進路意識が高いのであろう。また3年生については、ほとんどの生徒が誰かに相談しており、また実際に相談して進路を決定していかなければならない時期である。このような状況では相談相手が誰であるかはあまり問題でなく、相談していない、あるいは相談できていないことが進路意識を低めていると考えられる。

これに対して2年生では、教師に対する相談の有無は6つの下位尺度のいずれでも関連が認められなかったが、父親と母親については、相談する生徒は相談しない生徒よりも自己効力が高く、職業未決定が低い傾向にあった。2年生は進路決定にとって重要な時期であり、また進路をどうするかは子どもだけで決められることなく、親の意向、親からのアドバイスや励まし、自分の希望に対する同意などを得ることが子どもの進路決定を順調なものにするだろう。

教師への相談の効果がみられなかったのはなぜだろうか。清水・坂柳(1988)では、教師と話す程度は、両親や友人と話すことよりはその効果が弱かったが、とくに男子高校生の進路成熟と関連していた。本研究の結果との違いは高校の特徴による部分もあるだろうが、時代の変化によって解釈される部分が大きいだろう。情報化社会が急速に発展し、大学などは積極的に情報公開しており、生徒は先生を通さなくても進学情報を直接手に入れるようになった。またオープンキャン

パスなど生徒が大学に触れる機会も多くなった。教師には進学指導の専門家としての役割がまだ求められているとはいえ、その重みは小さくなっている。しかし本研究でも3年生で教師への相談が増えていることから、具体的に進学先を決定する時期になると、教師の役割の重要性が増してくる。やはりプロとしての適切な進路指導を教師に求めているのであろう。

〔謝辞〕

本調査にご協力いただきましたH高等学校の先生方、また生徒の皆様にご心から感謝いたします。

〔引用文献〕

- 測上克義(1984a) 進学志望の意思決定過程に関する研究 教育心理学研究, 32, 59-63.
- 測上克義(1984b) 大学進学決定におよぼす要因ならびにその人的影響源に関する研究 教育心理学研究, 32, 228-232.
- 古澤照幸・山下利之(1993) 女子高校生の進路志望動機と進路決定 社会心理学研究, 8, 98-106.
- リクルート進学総研(2012) 第5回「高校生と保護者の進路に関する意識調査」 キャリアガイダンス, 40, 6-35.
- 清水和秋・坂柳恒夫(1988) 進路不決断と進路成熟—父親, 母親, 友人, 教師の影響に関する高校生の横断的な研究— 進路指導研究, 9, 28-36.
- 鹿内啓子(2004) 女子高校生の進路選択に関わる要因 北星学園大学文学部北星論集, 41, 13-28.
- 下山晴彦(1986) 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究, 34, 20-30.
- 富永美佐子(2006) 高校生のための進路選択自己効力尺度の作成—内容的妥当性・併存的妥当性の検討から— 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 54, 355-375.
- 浦上昌則(1993) 進路選択に対する自己効力と進路成熟との関連 教育心理学研究, 41, 358-364.

